

県央史談会史跡めぐり

平塚海軍火薬廠

令和4年(2022)9月11日 午前日程

平塚は江戸時代には東海道の宿駅の一つとして発展した宿場町であるが、明治38年(1905)に日本火薬製造株式会社が進出して以降は、工業都市としての歩みを進めることとなる。この日本火薬製造株式会社は、大正8年(1919)に海軍省に買収され海軍火薬廠となり、これに伴い大小の軍需工場が造られ発展した。しかし、このため昭和20年(1945)7月16日から17日未明にかけて、米軍のB29爆撃機の大規模な空襲を受ける。「平塚大空襲」である。

戦後は戦災復興都市の指定を受け、現在の商工業都市へと生まれ変わった。区画整理事業により海軍火薬廠は整理されたが、現在も各所にその痕跡を留めている。今回はそうした戦争遺跡を確認し、最後に平塚市博物館にて関連資料を見学する。

平塚市の歴史(平塚市ホームページを参照)

旧石器時代から数多くの遺跡が発見されており、特に縄文時代の五領ヶ台貝塚、弥生時代の坪ノ内遺跡(四之宮)、古墳時代の真土大塚山古墳(真土)、塚越古墳(金目)などが著名である。真土大塚山古墳は三角縁神獣鏡を出土した前期前方後円墳であり、大和朝廷との繋がりが指摘されている。また、奈良・平安時代には四之宮周辺に相模国府が置かれたことが認められている。安土・桃山時代には徳川家康が中原御殿を造営し、宿駅・伝馬制度が制定され平塚宿ができた。明治20年(1887)には東海道本線横浜～国府津間が開通し、平塚ステーションが開業した。以後の主な出来事は次のとおりである。

大正8年(1919)	日本火薬製造株式会社が海軍に買収され、海軍火薬廠に
昭和4年(1929)	平塚町と須馬町が合併して、平塚町に
昭和20年(1945)	平塚大空襲。市域約7割の戸数が焼失
昭和25年(1950)	平塚復興まつり(七夕まつりの前身)を開催
昭和26年(1951)	第1回七夕まつり開催
昭和51年(1976)	博物館が開館
平成3年(1991)	美術館が開館。総合公園前面オープン

平塚八幡宮

『新編相模国風土記稿』(平塚新宿)に「八幡社 当宿及八幡・馬入三村の鎮守なり」とある。

新宿 慶長年間(1596～1615)頃に八幡村から分かれた宿で、当初は八幡新宿と称された。

慶安4年(1651) 平塚宿へ加宿

明暦元年(1655) 平塚新宿と改称、戸数119(『新編相模国風土記稿』)

明治22年(1889) 平塚宿と合併、平塚町となる

昭和4年(1929) 須馬町と合併

昭和7年(1932) 平塚市制施行

八幡村 平塚八幡宮から起こった地名、現在、東八幡と西八幡に区分されている

明治 22 年 (1889) 四之宮・真土・中原上宿・中原下宿・南原と合併、大野村の一部となる

昭和 31 年 (1956) 大野村、平塚市と合併

馬入村

明治 22 年 (1889) 須加村と合併、須馬村となる

昭和 4 年 (1929) 平塚町と合併

平塚八幡宮は、『八幡宮縁起』(成立年不詳)によれば、仁徳天皇の 68 年(平塚八幡宮では西暦 380 年とする)の相武国大地震の際に、父応神天皇祭祀により地震鎮静したのを機に八幡大神の社殿建立がはじまりとし、この地を八幡といったという。

『相模国大中郡鶴峯山八幡宮之記』(寛永 14 年 (1637))は、神亀年中 (724~729)、宇佐神宮を八幡村の相模川付近に勧請したという。

建久 3 年 (1192) 8 月 9 日、頼朝、政子の安産祈願(実朝)に神馬を奉納(『吾妻鏡』)

天正 19 年 (1591) 11 月、徳川家康、社領 50 石寄進(『新編相模国風土記稿』)

別当 覚院 号は鶴峯山成事智寺、開山開基不詳(『新編相模国風土記稿』)

大門 東海道往還北側に銅鳥居「鶴峯山」扁額(『新編相模国風土記稿』)。明和 2 年 (1765)、本誓還真奉献、東海道・大門通り四つ角に建立。万延元年 (1860) 再建、大正 12 年 (1923) 関東大震災で倒壊、昭和 7 年 (1932) 境内へ移設(現二の鳥居)。大住・淘綾・高座・愛甲郡内 385 名の寄進者を記す。

明治維新の神仏分離令により、八幡宮から八幡神社へ改称。別当 覚院は廃寺、18 世玉看が復飾、雲出高明と改名、神職となる。

社殿 関東大震災で全壊、昭和 3 年 (1928)、現社殿再建

平塚八幡宮 昭和 53 年 (1978)、現社名「平塚八幡宮」へ改称

祭神 応神天皇、神功皇后、武内宿祢

末社 若宮八幡・神明・天神・諏訪・辨天・愛染・第六天・浅間荒神・客人(『新編相模国風土記稿』)

櫻ヶ丘八幡神社(岐阜県高山市) 寛治元年 (1087)、八幡村住人が八幡宮の分霊を分祀したという(『国府祭 相模国府祭調査報告書』)。

海軍火薬廠

海軍火薬廠令 大正 8 年 3 月 26 日 朕海軍火薬廠令ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

勅令第 33 号 海軍火薬廠令

第 1 条 神奈川県中郡平塚町ニ海軍火薬廠ヲ置ク

第 2 条 海軍火薬廠ハ火薬類及其ノ原料ノ製造修理審査及研究ニ関スルコトヲ掌ル所トス

第 3 条~17 条

附則 本令ハ大正 8 年 4 月 1 日ヨリ之ヲ施行ス(アジア歴史資料センター)

日本火薬製造株式会社

明治 38 年 (1905) 12 月 5 日、日本政府とアームストロング社、チルウォース社 (ヴィッカーズ社の説もある)、ノーベル社英国 3 社の合併会社としてロンドンで設立された。場所は平塚町と隣接の大野村にまたがる 38 万坪の土地を買収した。支社が平塚に置かれた。契約期間は 10 年、満了後は日本政府が買収又は期間延長となっていた。

大正 8 年 (1919) 4 月 1 日、海軍火薬廠となり、昭和 20 年の太平洋戦争終結まで火薬製造が行われた (『平塚の戦争遺跡』)。

日本火薬製造所建設の背景

- ① 明治の日本海軍はイギリスの兵式にならった
 - ② アームストロング社・ヴィッカーズ社の軍艦・兵器が使用された
 - ③ ノーベル社・チルウォース社は爆薬・火薬製造会社だった
 - ④ 中原に広大な幕府の御林があった
- ⇒大規模工場建設用地、輸送の利便性、横須賀に近い
⇒平塚 (『平塚の戦争遺跡』)

海軍火薬廠の規模

	従業員数	火薬製造能力
大正 8 年 (1919)	600 名	1200 トン
昭和 6 年 (1931)	800 名	
昭和 13 年 (1938)	950 名	
昭和 14 年 (1939)	2000 名	3500 トン
昭和 19 年 (1944)	4500 名 (徴用工・学徒など総員 8500 名)	7000 トン
昭和 20 年 (1945)	5034 名 (総員 5661 名) (『平塚の戦争遺跡』)	

海軍火薬廠の変遷

明治 38 年 (1905) 日本火薬製造株式会社
明治 40 年 (1906) 日本爆発物製造株式会社
大正 8 年 (1919) 海軍火薬廠 (火薬部・研究部・爆薬部)
昭和 4 年 (1929) 爆薬部が舞鶴 (京都府舞鶴市) へ移転
昭和 14 年 (1939) 海軍火薬本廠 (火薬部・研究部) = 平塚
海軍火薬支廠 = 船岡 (宮城県柴田郡)
昭和 16 年 (1941) 船岡 → 第一海軍火薬廠
平塚 → 第二海軍火薬廠
舞鶴 → 第三海軍火薬廠
昭和 20 年 (1945) 廃廠、進駐軍接收
昭和 25 年 (1950) 横浜ゴムへ払い下げ (『平塚の戦争遺跡』)

平塚大空襲

昭和 20 年 (1945) 7 月 16 日から 17 日にかけての深夜に行われた。空襲の行われた時間は 100 分間といわれ、投下された焼夷弾は 1046 トン、約 40 万本であった。死者数は 300 人以上とされている。

この日には、平塚のほか沼津、大分、桑名が同時に爆撃された。(『市民が探る平塚空襲 通史編 I 平塚空襲の実相』)

八幡山の洋館 (国登録有形文化財)

建設年 明治 39 年 (1906) 又は明治 40 年 (1907)

設計者 日本火薬製造株式会社平塚工場の建設監督として英国ノーベル社から派遣されたカーリとその補助であるウィルソンによって設計されたと推測されている。

建築面積 225.90 m² (応接室 約 36 m²、第 1 会議室 約 64 m²、第 2 会議室 約 53 m²)
他にトイレ、廊下、ベランダ。部屋の名称は横浜ゴム (株) 呼称。

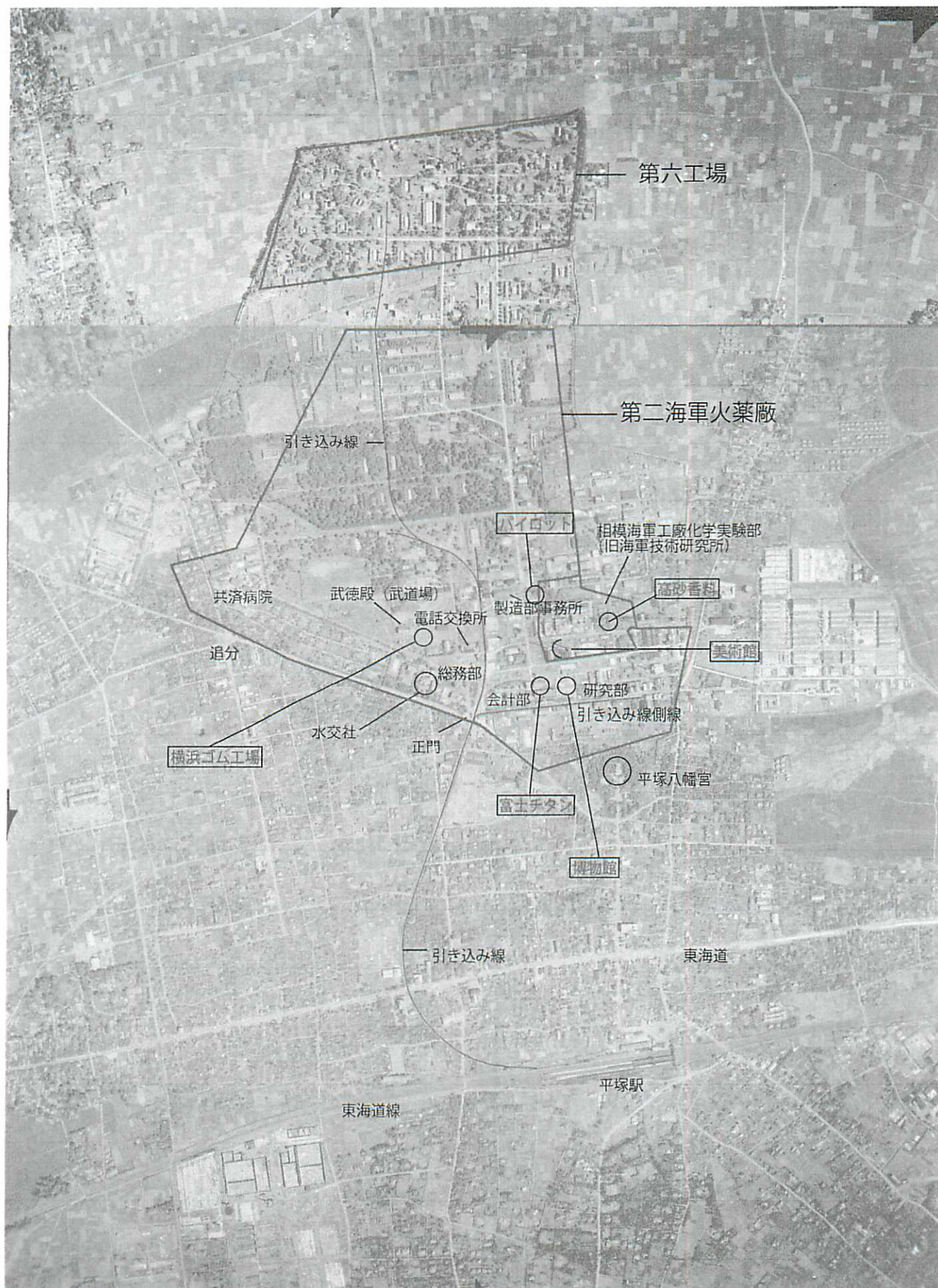
構造 木造平屋、塔屋付

仕上 屋根平鉄板葺、外壁ドイツ下見板張

基礎 石造及び煉瓦造 (一部コンクリート) 布基礎

建物の沿革

日本火薬製造株式会社の支配人執務室として建築された。大正 8 年 (1919) に同社が日本海軍に買収され海軍火薬廠となつてからは、この建物は横須賀水交社平塚集会所として利用された。水交社とは日本海軍の少尉候補生以上の武官と高等文官をもって組織された懇親団体の名称。戦後、横浜ゴム株式会社がこの建物を含む火薬廠の一部敷地の払い下げを受け、主に応接室や会議室として利用されてきた。昭和 30 年 (1955) に神奈川県で第 10 回秋季国体が開催された際には、行幸された昭和天皇の休憩所としても使用された。海軍時代に一部改造されたが、昭和 30 年 (1955) に修築が施され、概ね創建当初に近い姿に復元された (平塚市ホームページ・リーフレットから)。

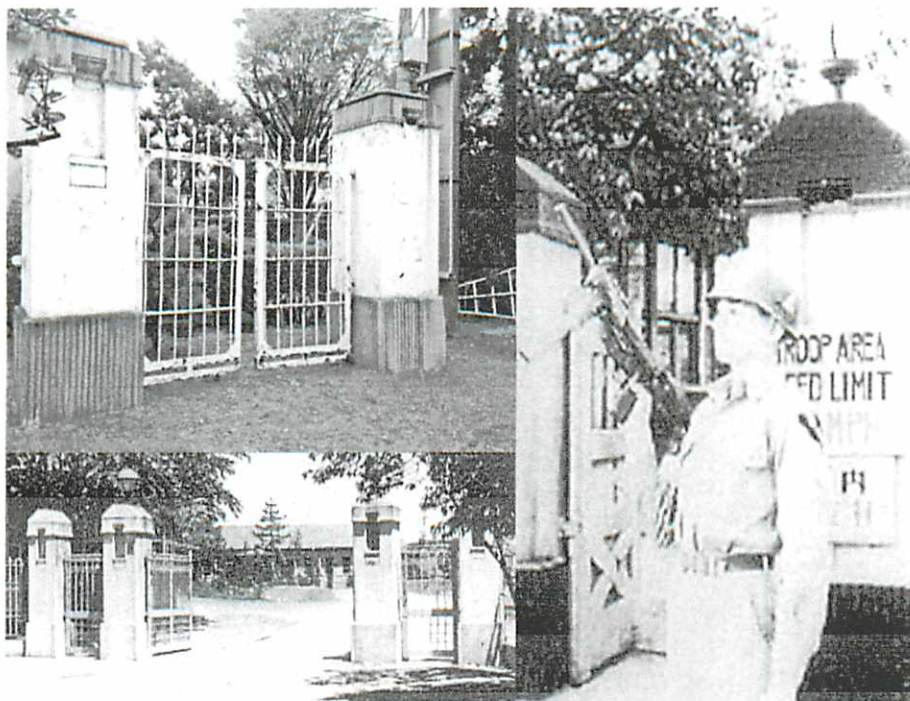


昭和 21 年（1946）の平塚

（昭和 21 年（1946）8 月 15 日 米軍撮影 R227-A-3、9 月 12 日 R227-A-6 改変）

※ 長方形の囲い文字は現在の施設

※ 空中写真は国土地理院 Web サイト地図・空中写真閲覧サービスによる



火薬廠正門門柱

横浜ゴム工場内

明治末期～大正初期。現在に至るまで使用されている門柱。

かつては4本の柱がたっていたが、現在は真ん中2柱は移設されている。

※右写真：正門前で警備を行う進駐軍兵士

左下写真：関東大震災後の正門

(横浜ゴムホームページより)



参考館

横浜ゴム工場内

昭和初期頃建設。通信、防空監視を行う建物であったという。

防空監視室の一部、防火扉、トイレなどが遺存

(横浜ゴムホームページより)



第二工場 綿葉精製場

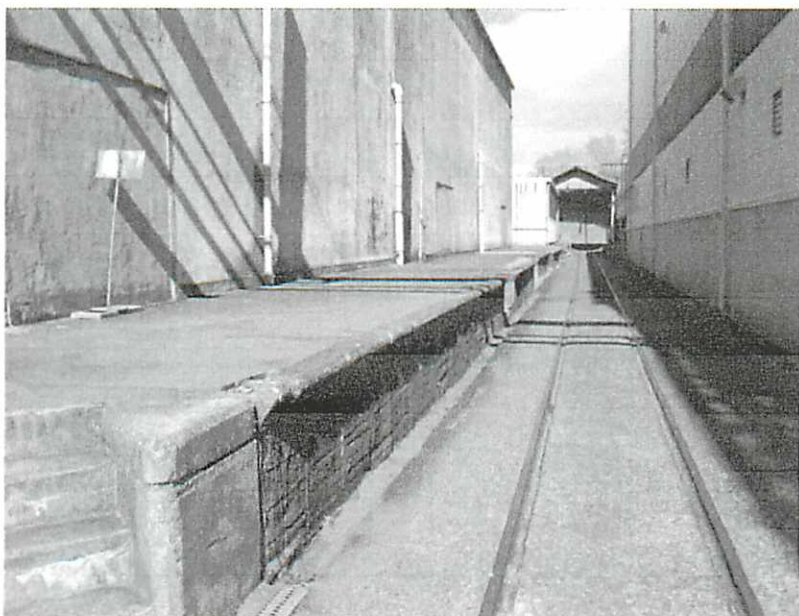
現富士チタン工業株式会社平塚工場内

(Webページより)



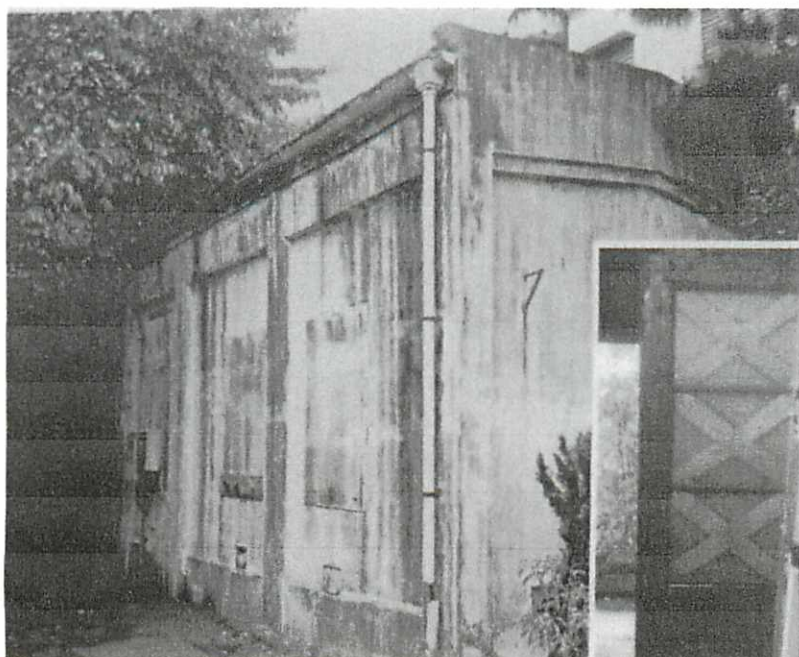
旧海軍執務棟
横浜ゴム工場内

昭和初期頃の建設と伝わる、鉄筋コンクリート造の建物。海軍使用時は2Fにバルコニーがあったことが終戦時の写真で確認されているが、現在は取り壊されている。入り口は鉄扉の二重構造で、扉右下には進駐軍接收時に書かれた建屋整理番号(25)が残っている。
(横浜ゴムホームページより)



旧引き込み線、プラットフォーム
横浜ゴム工場内

海軍火薬廠時代から1960年代まで使用されたプラットホームと引き込み線(専用線路)の遺構。当時は海上輸送・鉄道輸送が主流の時代であったため、当敷地から相模川下流方面へ専用線路が伸びており、海上輸送路と繋がっていた。
(横浜ゴムホームページより)



電話交換室
横浜ゴム工場内

昭和初期頃の建設と伝わる、旧海軍火薬廠時代の電話交換室の建物。鉄筋コンクリート造で、建物内外に防火扉が設置されており、現在も現存している。建屋入り口は鉄扉の二重構造になっており、当時貼られたガラス飛散防止用のテープなども確認できる。(写真右)
(横浜ゴムホームページより)

